

研究会・地域部会の報告書

提出者：鎌田 真由美 / 提出日：2022.12.20

研究会・地域部会名	関西地域部会
代表者(所属機関名)	鎌田 真由美 (京都大学)
タイトル(イベント名)	第33回バイオメディカル研究会 「個人情報とデータ利活用」
日時	2022年12月7日 13:30~16:30
場所	グランフロント大阪・Zoom ウェビナーのハイブリッド
共催団体	公益財団法人都市活力研究所
後援団体	NPO法人近畿バイオインダストリー振興会議、 NPO法人バイオグリッドセンター関西
参加人数	登録 115 名・瞬間最大聴講 (フロア含) 94 名
<p>目的：</p> <p>近年、ゲノム情報などのデータ利活用による医療・創薬の発展に期待が高まる一方、個人情報保護法は2年続けて改正され、企業・研究機関における個人情報を含むデータ利活用には多くの課題がある。そこで、第33回研究会では「個人情報を含めたデータの扱い・利活用」をテーマに、個人情報保護法改正におけるポイントを学ぶとともに、情報を「集める」「使う」それぞれの観点から、現状と課題について共有し、創薬・医学研究におけるデータ利活用の展望について議論した。</p>	
<p>概要：</p> <p>下記4題について、ご講演を頂いた。            詳細なプログラムは以下のリンク参照のこと。  <a href="https://urban-ii.or.jp/events/detail.php?event_id=500">https://urban-ii.or.jp/events/detail.php?event_id=500</a></p> <p>&lt;演題&gt;</p> <p>講演1 (オンライン)「個人情報保護法の改正に伴う倫理指針の改正について」            鈴木 和代 先生 厚生労働省 大臣官房厚生科学課</p> <p>講演2「医療情報の取り扱いを巡るルールと実践」            黒田 知宏 先生 京都大学医学部附属病院 医療情報企画部 教授</p> <p>講演3 (オンライン)「保険診療で行われるがん遺伝子パネル検査データの利活用」            河野 隆志 先生 国立がん研究センター がんゲノム情報管理センター(C-CAT)            情報利活用戦略室 室長</p> <p>講演4「プライバシー保護データ解析技術とその応用」            花岡 悟一郎 先生 産業技術総合研究所 サイバーフィジカルセキュリティ            研究センター 首席研究員</p>	

成果および感想：

今回は「個人情報とデータ利活用」をテーマに、個人情報に該当するデータの扱いに関わる法令について、そして、そのようなデータをどのように利活用するのかと、適用が期待される情報技術に関して、4名の講師からご講演をいただいた。

まず厚生労働省の鈴木先生より、人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針をはじめとした、研究開発に関わる指針において、個人情報保護法の改正に伴い押さえておくべきポイントについてご講演をいただいた。京都大学の黒田先生からは、個人情報保護法および倫理指針遵守のもと、どのように医療情報を管理し、さらに活用のためにどういった基盤が必要なのかについて、京都大学医学部附属病院での取り組みを通してお示しいただいた。さらに、2019年に保険適用となったがん遺伝子パネル検査により産み出される膨大なデータを管理する C-CAT での取り組みについて、国立がん研究センターの河野先生から、具体的なデータ項目をお示しいただきながら利用のための手順をご説明いただくとともに、がん領域での研究事例についてもお示しいただいた。産業技術研究所の花岡先生からは、秘密計算について、基本から現在までの技術発展の状況、そして今後期待される実践的な実装に向けての取り組みについてご講演をいただいた。取り組みのご紹介においては、バイオインフォマティクスに関連するゲノム情報や臨床データへの適用事例もお示しいただいた。最後のディスカッションでは、参加者からいただいたご質問、特に亡くなった方のデータの扱いに関する質問やゲノムデータを個人情報とする定義に対して、講師の先生からご意見を伺った。

終了後のアンケート結果も全て「満足した」「非常に満足した」であり、「論点や方向性が理解出来た」「勉強になった」とのお声を多くいただいた。快くご講演を引き受けて下さった4人の先生方、参加者の皆様とこのプログラムの実現にご尽力いただいた関係者の方々に、心から感謝する。また、講師からご提供いただいたご講演資料を会員に共有させていただいた。運営に関しては、今回初めてオンサイトと Zoom ウェビナーによるハイブリッドにて開催した。登録数に対し現地にお越しいただいた参加者数は少数であった。現地にお越しいただいた方とは様々なお話をすることができ、対面の良さを実感した一方で、開催方式について改めて検討が必要であると感じた。次回以降の研究會運営に活かしていきたい。